

筑波大学日本文学会会報

第27号

2003年2月

私が読む（谷口孝介）	1
日本文学会だより	3
研究室だより	4
新刊紹介	10
卒業生だより	13
日本文学会教官学生名簿	15

私が読む

谷 口 孝 介

二十台のある時期、毎週のように夜の十時すぎに、尼崎から梅田に向かう阪神電車に乗っていたことがある。都心を走る電車とはいえ、勤め帰りの乗客とは逆行するので、乗っている人はまばらである。急行だと十分そこそこのあいだ、わたしはといえぱぐったりと疲れきって、車窓の暗闇をぼんやりと見やりながら座席に沈んでいたのであるが、尼崎を出て大物から杭瀬に行くあいだ、妙なカーブが左に右にあり、なんだかふわっと宙に浮くような感覚に襲われたものである。

そんなどうでもいいような記憶がまざまざと蘇ったのは、宮本輝「幻の光」のつぎの一節を読んだときであった。

現場は杭瀬と大物の間で、電車を運転してた人の話では、あんたは線路の真ん中を進行方向に向かって歩いてたんやそうです。ゆるいカーブになって、人間の姿が照明灯の中に入ったときは、もう間に合えへん距離やった。警笛の音にも、ものすごいブレーキの音にも振り返らんと、あんたは轢かれる瞬間までまっすぐに歩きつづけてたんやて。立ってた乗客が六人ほど、急停車で振っ飛ばされて怪我をしまったそうや。

理由も見あたらず、とつぜん自殺としか思えないようなありさまで死んでいった夫に向かって、妻がモノローグで問いつづけるスタイ

ルをもつこの短編小説の、核心ともいべき箇所である。小説の舞台設定としては、この「ゆるいカーブ」は電車の運転手の視界を遮って発見を遅れさせるものとして機能しているのだが、それだけでない身体感覚を読者に与えてもいる。もちろん線路のうえを歩いている人がカーブを感じているわけではない。ただ何かに憑かれたようにとぼとぼと歩いていただけであるのだが、その身体感覚を読者に感じとらせるものとしてこのカーブがある。カーブをしつかりと体感するには電車に乗るほかはないのであるが、このふわっと宙に浮くような不思議な感覚に共感することが、線路のうえを何かに憑かれたようにとぼとぼと歩く人の身体感覚を感じとる方法ともなるのである。小説の冒頭近く、奥能登の曾々木の海を眺めながら、語り手は「幻の光」についてつぎのようにいう。

ほれ、ここらでは滅多に見られへんような緑色ののつべりした海に、ひとかたまりになつてちかちか光つてる部分がありますやろ。魚の大群が海の底から湧きあがつて、波間で背びれをのぞかせてるみたいやけど、あれは何でもないただの小さい波の集まりなんや。目には映らへんけど、ときおりああやつて光が海面で踊りはねるときがあつて、さざ波を一部分だけ一斉に光らせるんや。それで遠くにいる人の心を騙すのやて、お義父さんが教えてくれはった。人間の、いつたいどんな心を騙すのかはつきりとは判らんけど、そう言えばわたしにも、何かしたひょうしに、あのさざ波の光の群れを、我を忘れて見つめてるときが何遍もありました。大漁なんかにくわしたことはないここらへんの漁師くずれの寝ぼけまなこに、一瞬夢を見させるような不穏なさざ波やと、お義父さんは言いたかったのかも知れへん。そやけどその話を聞いたとき、わたしにはもつと別の意味があるような気がしたんです。ただそんな気がしたというだけで、それがいったいどんなことなのか、わたしには判らんかった。

人の心を騙す一瞬の光に魅入られるように生きる精が抜けて、線路のかなたの闇のなかの「幻の光」に吸いこまれていく人の姿が、そこには透けて見えるのである。「幻の光」に惑わされた人の感覚をあのカーブが体感させてくれていたのではないか。冒頭に挙げた一節を読んだおりに、ふいに蘇ったあのふわっと宙に浮くような身体感覚は、わたしにとっては、この線路のうえをとぼとぼと歩く人物の、もに憑かれた身体状況をまさに的確に感じさせてくれたのであった。この作品は是枝和裕監督によって映画化されて、一九九五年にヴェネチア映画祭で「金のオゼツラ」賞を受賞したことで話題となったが、映画には映画なりの映像表現の論理があるとはいふものの、哀愁を漂わせた色調のなかで、光を魂の救済と読みかえている点には、やはり抵抗を感じる。「人間は、精が抜けると、死にとうなるんじゃけ」という民雄さんのことばには、救済の手から抜け落ちていく魂の本性が言いあてられていると思われるからである。